

気前のよいお客さま

「公共事業と競争入札」考



何かと話題の多い2020東京五輪・パラリンピックの開催準備。競技会場の建設費が当初の2倍に跳ね上がり批判の声が上がると、それなりに圧縮されるなど、エレベーターのように自在に上下する。

理由は二つある。一つは便乗型の上乗せが行われていること。つまり五輪準備を名目にすれば抵抗は少ないだろうと、なんとか理屈をつけて財源を欠く施策にも予算をつけるテクニクが駆使されているからだ。あの東日本大震災の復興予算が被災地と関係のない地域における公共土木事業に支出されていたことを覚えていた読者もいるだろうが、それと同じことだ。そんなことは起こらないと

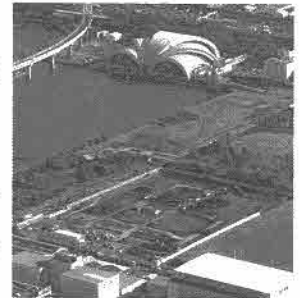
は思うが、例えば複数の国内ルートで聖火リレーが行われることになれば、それを理由に国内のあちこちで街路の整備が進むかもしれない。それも五輪予算という名目で、もしそんなことができれば、直したい街路をリレールルートにすれば目的は達する。便乗型とはそんな姑息な手段で予算を確保しようとするのである。ただ、精査すれば便乗を排除できるはずだ。

もっと大きな問題は、発注者側の積算に基づく入札が不調であったため、受注側の知恵を借りて予定価格を積算し直して再入札したことである。その結果、改定された予定価格にほぼ等しい落札価格となった。要するに積算能力が

ない発注者側に予定価格を積算させる制度に欠陥がある。

受注者側は人手が足りないなどのさまざまな理由で積算の積み上げを求めたといわれている。しかし、一体どこの国で費用が倍になるほど人件費が高騰しているのだろうか。資材価格が高騰しているのであれば、インフレ目標などとしてクリアできているはずではないか。

積算価格の増大の理由は単価の上昇だけではあるまい。いつの間にか予定された工事の方法が変更されることがあることは、東京都の他の大型工事で発覚しているから、いろいろと追加的な工事が上乘せされることもあるだろう。その方が受注者には都合がよい。



「五輪水泳センター」新設予定地（手前の工事中の土地）。奥は東京辰巳国際水泳場＝東京都江東区

探られるはずだ。それができないのは、公共工事に競争入札という制度的な枠がはめられているからである。その結果、形式的には入札の形を取りながら、現実には、売り手の言いなりの価格で買い物をする気前の良いお客さまになっている。

その結果、競争入札という手段が無駄遣いの排除という本来の目的からは遠のいている。もし発注者側の積算が非現実的で受注者側の意見聴取が必要だとすれば、入札制度を墨守するは見当違いであり、時代にそぐわなくなっていると考えるべきだろう。

（東京大名誉教授 武田 晴人）